

ユネスコの提唱する「国際理解をめざす教育」の 実現に迫る広島市内A小学校の実践

－特別活動を中心に据えた20年間の取組－

二宮 孝司

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

本稿は、小学校における「国際理解教育」のねらいや活動が、ユネスコの提唱する「国際理解をめざす教育」に沿ったものとなっているかを検証することを目的としている。1948年のユネスコ決議以降、国や文部科学省が発信してきた内容をたどるとともに、国際平和文化都市である広島市中心部に位置するA小学校の「国際理解教育」の実践の歩みを報告する。日本における各学校の実践は、狭義の「外国の人々や文化の理解や交流」であることが多いが、A小学校では、特別活動を中心に据え、「国際理解の日（国際理解デー）」を設定し、学校行事として20年間実施している。その過程で、「多文化共生」をキーワードに、自治的な活動を展開し、「国際理解をめざす教育」に迫っていることを確認した。

キーワード：国際理解教育，特別活動，多文化共生，人権教育，平和教育

はじめに

今日これまでに体験したことのない新しい時代の転換期を迎え、科学技術、経済、情報、通信、交通などの国際化が社会構造に大きな影響を与え、教育の在り方にも大きな変化をもたらしている。教育改革も新たな局面を迎え、中教審答申（令和3年3月）では、日本語指導を必要とする児童への個別最適な学びの必要性が強調され、広島市でも、外国にルーツをもつ児童の編入が増加しており、喫緊の課題としてとらえられている。広島市小学校校長会の調べでは、対象児童の在籍校が、広島市141校のうち、平成27年度の38校から令和2年度65校と急増し、日本語指導体制の充実と合わせ、国際理解教育の必要性について校長から数多くの声が挙がっている。また、国際平和都市としての広島市も、広島市教育大綱の中で「若い世代の未来の担い手に共助の精神を基盤とした『地域共生社会』の実現を図り、これを基軸として、本市の都市像である国際平和文化都市の具現化を図っていきたい。」と述べられている。国際理解教育の必要性を感じるとともに、あらためて、「国際理解教育」に焦点を絞って、その目的や意義を確認するとともに、具体的な実践事例からその検証を行うこととする。

1 国際理解教育のとらえなおし

日本国内で使われる「国際理解教育」という表現は、国際的に提起されてきている表現では「国際理解をめざす教育」(Education for international understanding)である。これは、ユネスコの「協同学校計画」の展開や国際公教育会議で採択された「学校における国際理解をめざす教育に関する勧告(1945)」で新しく出発した国連及びユネスコを中心とする専門職間の国際教育への取組の主題とされてきたものである。

(1) ユネスコのめざす国際理解教育の姿とは

① 「協同学校計画」

ユネスコは「国際理解」と「国際協力」をめざす教育の「共同学校計画」を発足させ、学校教育への具体化を目指しており、その主な内容は次のとおりである。

- 1 世界の諸問題と国際協力への認識
- 2 他国の人々と文化への理解
- 3 人権諸原則の尊重の強化

「国際理解教育」とは、「国際理解教育をめざす全般的な教育の発展の促進を図る」ことを基本的なねらいとしているといえる。

では、日本国内での学校における国際理解教育はどのようなものであろうか。「他国の人々とその文化への理解」は主題の1つとして当然含まれるが、狭義の国際理解であるといえよう。また、地域実態に即したそれぞれの学校の取組も単発で終わることが多く、広く共有されたり、発展的に教育課程の中に位置づけ定着させたりする学校は多くはない。また、一つの学年やある教科の中で取り上げられることはあっても、学校全体での取組となると、実践事例は少ないのが現状である。「国際理解」として他国の人々と文化の交流が目的化され、真に「国際理解をめざす教育」になっているとはいいがたい。

一方で、今日加加速度的に進む国際化の中で、これからの時代を担う児童生徒には先に述べた「国際理解をめざす教育」が喫緊の課題といえる。そして、他の文化への理解が自分たちの文化といかに異なるかを認め、寛容の態度を養うとともに、世界の当面する課題に照らし、人々の人権や平和への希求と結びつけて総合的に取り組むことが望まれている。つまり、国際理解教育は単に他国や地域の文化を理解するにとどまらず人権、平和の希求といった現代生活の普遍的価値の実現のために取り組むべき人類的な諸問題の解決のための学習をさすであろう。

(2) 1968年ユネスコ総会で議決された各国文部省に対する勧告

「教育課程及び学校生活に不可欠の一部としての国際理解をめざす教育に関する各国文部省に対する勧告第64号」

【初等中等学校での学習と活動】

- 1 初等・中等学校のエ育課程に通常含まれる学習内容の大部分は、国際理解のための教育機会を提供する。それぞれの教材は、児童生徒の年齢、適性、興味を十分に考慮

して、適切な方法で開発されなければならない。また、学校は、学校を構成するすべての者が正義と公平、寛容、そしてあらゆる種類と条件の人々への尊敬という資質を獲得できるような雰囲気を作り出さなければならない。

- 2 国際理解をめざす教育は、各教科を効果的に参加させ、調整されかつ継続的、累計的に毎年前進する計画への適切な手立てによって、学校での学習の不可欠な部分として計画され、実施されるべきである。

【教授法及び教科外の諸活動】

- 1 教科外の諸活動は、学校のエデュケーションを通じて国際理解をめざす教育を充実し、強化するために、必要に応じて再編成されなければならない。これらの諸活動は、すべての児童生徒にその特別な興味と能力を働かせ、発達させる機会を与えるのに十分なほどの広がり種類のものでなければならない。

（3）国内の「国際理解教育」のとりえと動き

文部科学省に対する勧告以後に出された中央教育審議会答申や学習指導要領の内容等から「国際理解教育」に関連する記述やとらえ方を見ていきたい。

① 1969年4月中学校学習指導要領 社会科

「世界におけるわが国の役割を理解させて国民としての自覚を高めるとともに国際理解を深め国際協調の精神を養う」とある。

② 1984年臨時教育審議会答申

「次世代の日本人にはこれまで以上に深く、広い国際社会に関する認識、すなわち、世界各国の文化、歴史、政治、経済等に関する認識を要求されるだろうし、異文化と十分に意思の疎通ができる語学力、表現力、国際的礼節、異文化理解能力等が求められことになるであろう」と述べられている。

③ 1995年第15期中央教育審議会答申

「国際理解教育の充実」という項目を設け、「広い視野と共に、異文化に対する理解や、異なる文化をもつ人々と共に協調して生きていく態度を育成することは、子供たちにとって極めて重要なことである。」と述べられており「違い」を「違い」として認識していく態度や相互に共通している点を見つけていく態度、相互の歴史的伝統・多元的な価値観を尊重し合う態度を育成することが大切であると述べられている。

2 国際理解教育をめざす教育の実現～A小学校の「国際理解教育」20年間の変遷～

ここからは、広島市内のA小学校における「特別活動」を中心とした国際理解教育の取組を実践について紹介する。20年間の変遷とその時々へのねらいや意義にふれながら、ユネスコの提唱する「国際理解をめざす教育」に迫ることができているかを検証する。

（1）必要性和必然性の中での模索～国際理解教育のあゆみ①

明治以後、軍の施設として活用されていた三角州の中央に西日本最大規模の公営住宅群

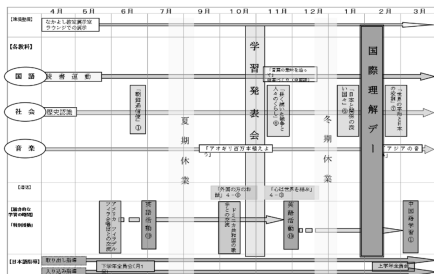


図1：年間教育計画（国際理解関係）

による外国人の編入も合わせ、帰国・外国人児童の全校児童に占める割合は約45%に達している。また、就学援助率は90%を超え、落ち着いて学習する環境が整っていない家庭も少なくない。さらに、アイデンティティをもてない児童生徒も多く、希望通りの高校進学ができなかったり、中退したりする卒業生もいる。地域では、入居が増加している外国人に対する理解が十分とはいえない面がある。一方で、地域の活性化に向けた動きもあり、地域の拠点としてのA小学校の役割は年々大きくなっている。

A小学校では、国際理解教育年間計画をたて、1年間の締めくくりとして、学校行事「国際理解の日（国際理解デー）」を設定している。

平成10年からの7年間の学習内容は、右の通りである。ゲストティーチャーとして在籍児童の保護者を中心に来てもらい、約4時間を使って、より深い内容の理解に迫ろうとしている。

	国・地域	テーマ	ゲストティーチャー
平成10年	中華人民共和国	水墨画を通じての異文化理解	広島電機大学講師
平成11年	フィリピン	フィリピンの料理を通じての異文化理解	本校保護者
	モンゴル	馬頭琴とピアノの調べ	ブレンントグスさん・トリグルさん
	大韓民国	民族楽器・チャンゴの習き	韓国民謡のチャンゴグループの方
平成12年	カザフスタン共和国	歌と民族舞踊・セミバラチンスクについて知る	山崎女子高校留学生
	ロシア連邦	モスクワの街の様子と子ども達の夏休みのくらし	本校児童
平成13年	中華人民共和国	遊び・言葉・生活など	広島市国際交流員
平成14年	ブラジル	ブラジルの歌と踊り	広島大学医学部留学生
平成15年	中華人民共和国	中国の地理・歌や言葉などの文化	本校保護者
平成16年	フランス	フランスの歌	リヨン少年合唱団

図2：「国際理解の日」に扱った内容

（2）「異文化理解から多文化理解へ」～国際理解教育のあゆみ②

平成17年から活動内容を大きく転換し、新たな国際理解教育の重点目標を設定した。

① 人間理解

自己の考えをしっかりと持ち、主体的に生きる心と力を持つとともに、世界には様々なものの考え方、価値観、行動のしかたがあることを知り、人間としての共通性を認識し、その多様性を積極的に評価できる態度を養う。

② 文化理解

広い視野と柔軟な思考によって自他の文化に関心をもち、それらの普遍性・多様性・等価値性を理解し、物事のよさや人々の立場や心情を感じ取る豊かな感性を培う。

③ 現実理解

自然・地理・人口・産業・経済などの世界の現状に関心をもち、各国・地域間の相互依存性や地球的課題を理解し、地球社会の一員としての自覚を持って課題解決に取り組む意識や行動力・技能を培う。

	コーナー	内 容	言 語	ね ら い					
				人間理解		文化理解		現実理解	
				自	他	自	他	自	他
①	韓国・朝鮮	朝鮮文化とクイズ(認識)	ハングル	◎	◎				
②	中 国	水餃子を作って食べる	中 国 語			○	◎		
③	パキスタン	パキスタンの衣装と機織体験	パキスタン語					○	◎
④	アメリカ	小学生の生活と英語のゲーム	英 語			○	◎		
⑤	ケニア	子どもの絵とクイズ(協力)	スワヒリ語	◎	◎				
⑥	インドネシア	楽器(アングレン)演奏体験	インドネシア語			○	◎		
⑦	日 本	餅をついて食べる	日 本 語			◎	○		
⑧	ルンペー	投げ縄でナカイを捕まえる	ルンペー語			○	◎		

図3：平成17年度「国際理解の日」に扱った内容とねらい

従来の1つの国を重点的に学習するのではなく、8か国のコーナーを約10人のたてわりグループで回り、世界の国を体験旅行するというものである。(図3) 1つのコーナー15分を目安に、その国の言語で挨拶したり、3つのねらいに即したそれぞれの国の体験をしたりする。

この平成17年には「初等中等教育における国際教育推進検討委員会」において、国際教育とは、「国際社会において、地球的視野に立て、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成する」ための教育と打ち出され、「有機的に連携を深めることの重要性」が強調された。A小学校では、日本語学習教室「全員会」や全校児童による「たてわりグループ」を生かし、リーダー指導と自治的な取組を推進してきた。これらを有機的につなげた取組が平成17年度から実施された。

(3)「多文化共生の学び」をキーワードに～国際理解教育のあゆみ③

「安心感」「つながり感」「役立ち感」でしっかり満たすことを通し「自己肯定感」をもたせるという自尊感情の育成を学校教育目標の中心にすえ、「多文化共生の学び」をキーワードに、国際理解教育の取組の視点を明確にした。特に、ルーツへの肯定感をもたせるために、事実を正しく知り、人々の生き方に迫る取組を行うことや保護者・地域に対する「多文化共生」の啓発にも重きを置いた。

【多文化共生の学び】

多文化共生の学びを図4のように整理した。

1) 教える内容

多文化共生についての教育 (about)

2) 文化的活動

多文化共生を通しての教育 (through)

3) 自治的活動

多文化共生をめざす教育 (for)

4) 共生 (学び合いの授業づくり)

多文化共生としての教育 (as)

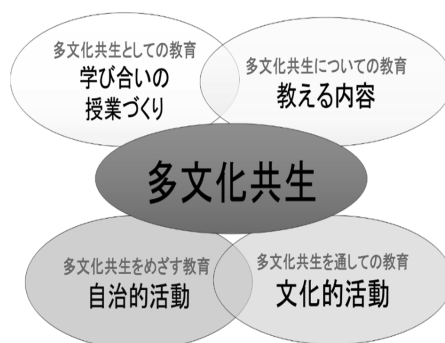


図4：多文化共生の考え方

A小学校がとらえる多文化共生は、いわゆる「3つのF」(Food, Fashion, Festival)とといった「文化的側面」に加え、3)と4)にある「自治」や「共生」につながる教育である。また、学校から多文化共生を発信することで、保護者や地域の人権意識の変容もめざしている。

ここからは、A小学校の平成23年度提案資料と平成24年度総括を示すことにする。

A 国際理解教育について

国際理解教育について		平成23年4月20日 国際平和推進委員会
1	研究推進体制の見直し 【人権教育・特別支援教育推進委員会】 「授業づくり」「児童理解」・・・世界なかよし教室や教育的ニーズのある児童に対する「わかる、できる実感」のある学び合いの授業についての研究を行い、基盤となる「自尊感情」の育成をめざす。 【国際理解教育・平和教育推進委員会】 「国際理解教育」「平和教育」・・・今日的な社会情勢を踏まえて2つを関連づけ、国際平和を希求する視点を持たせた「多文化共生」の学びを構築する。	
2	めざす子ども像の提示 (1) 中学卒業時に進路について夢をもって選択できる確かな学力とアイデンティティをもつ子ども。 (2) 多様な考えを尊重し合い、持続可能な社会の形成者としての子ども。	
3	国際理解教育のねらいの明確化 ① 自尊感情の育成（アイデンティティの確立） ② 多文化共生の学び（理解、交流等） ③ 学び合いの授業づくり（異なる考えを認め自分の考えを深める）と学力保障	
4	国際理解活動 (1) 国際理解の日 特別活動として、各教科との関連の中で、なかよしグループを単位として、ウォークラリー形式で5か国の各コーナー（20分）を回り、異年齢のつながりを深め、世界の国々や地域の文化に触れ理解を深める。また、自分たちの生活に引き寄せて考え、多様性や共通性の価値に気付く活動を行う。（平成24年度は中国、ベトナム、ブータン、オーストラリア、トルコ、フィリピン） (2) ^{注1} AHI（アジア保健研修所）との交流 アジア12か国からの研修生約20名が、ヒロシマや基町の平和学習について学ぶとともに、本校児童と給食交流を行う。英語で会話をしたり、基町ソーランや龍踊りを披露したりする。	

B 取組の実際「国際理解の日」

「国際理解の日」実施計画案		国際平和推進委員会		
1	日時	平成24年2月2日（木）	8：50～11：40	
2	ねらい	① なかよしグループのメンバーで、ウォークラリー形式で各コーナーを回ることにより、異年齢児童間のつながりを深め、楽しみながら世界の国々や地域に関する体験をし、知識を深める。 ② 体験したことや見たり聞いたりしたことを、自分たちの生活に引き寄せて考え、多様性を積極的に評価したり、共通性や価値に気付いたりする。 ③ 発達段階に応じて、周りの人と仲良くすること、世界の人たちが幸せに暮らすために自分たちができることを考え表現する。		
3	テーマ・内容・担当者（ゲストティーチャー）・会場			
	国	内 容	ゲストティーチャー	会 場
A	ベトナム	ベトナムの遊びをやってみよう	ベトナムの留学生	体育館
B	ブータン	ブータン王国に尽くした日本人衣装の試着		もりの部屋
C	オーストラリア	アボリジニ文化の体験（伝説・アート）	一宮さん	音楽室
D	トルコ	日本とのつながり トルコアイスやお茶の試食		教育相談室 または理科室

E	中国	ぎょうざの皮をつかったお菓子試食	保護者	家庭科室
F	フィリピン	パンプーダンスを体験	保護者	体育館
	児童対応・救護			保健室

4 当日の流れと児童の動き

時 刻	内 容	備考														
～ 8:50	児童入場（体育館）															
8:50～ 9:00	オープニング															
9:00～11:25	ウォークラリー（まわる順序） <table><tr><td>G</td><td>順 序</td></tr><tr><td>1－2</td><td>A B C D E F</td></tr><tr><td>3－4</td><td>B C D E F A</td></tr><tr><td>5－6</td><td>C D E F A B</td></tr><tr><td>7－8</td><td>D E F A B C</td></tr><tr><td>9－10</td><td>E F A B C D</td></tr><tr><td>11－12</td><td>F A B C D E</td></tr></table>	G	順 序	1－2	A B C D E F	3－4	B C D E F A	5－6	C D E F A B	7－8	D E F A B C	9－10	E F A B C D	11－12	F A B C D E	<div>・参加したら、パスポートに「国旗シール」をはる。 （リーダーの役割） シールの管理・・・4年生 人・時間の管理・・・5年生 4．5年生のサポート・・・6年生</div> <div></div> <div>*早く終わったグループは 体育館で感想カードを書 く。</div>
G	順 序															
1－2	A B C D E F															
3－4	B C D E F A															
5－6	C D E F A B															
7－8	D E F A B C															
9－10	E F A B C D															
11－12	F A B C D E															
11:25～11:40	エンディング															

*二つのなかよしグループがセットでまわる。
*各コーナーでは、その国の言葉であいさつ（こんにちは・さようなら）をする。
*各コーナー間の移動を含め25分程度でまわる・・・各コーナー20分以内の内容
*5年生に時計を持たせ、時間の管理ができるようにする。
*印象に残ったことや、わかったことをパスポートに書き込めるようにする。

5 事前準備

国	掲示するもの	準 備 物
A ベトナム	・国旗 ・あいさつの言葉	
B ブータン		テレビ・PC
C トルコ		テレビ・PC
D オーストラリア		テレビ・PC
E 中国		
F フィリピン		
その他		感想を書くカード

6 全体の役割分担

●学生ボランティアの手配・応対・・・（ ）
●国際理解週間（1月25日（水）から2月2日（木））の読書の取組
・・・（ ）
●パスポート・シール・掲示用あいさつの言葉・国旗準備・・・（ ）
●全体時間調整・・・（ ） ●記録（カメラ）・・・各コーナーで行う

7 その他

*事前学習は実態に応じて各学年で取り組む。
*活動前に児童にわかりやすい目標を提示する。
*当日は各コーナー内で、交代して他のコーナーをまわれるように配慮する。

C 国際理解教育のまとめ

平成24年度 「国際理解学習」 平和・国際推進委員会 A小学校研究紀要より

(1) 平和学習 (略)

(2) 国際理解学習

① AHIアジア保健研修所研修生との交流 (9月21日), アジア・大洋州地域および北米地域との青少年交流 (11月27日)

ミャンマー・インドネシア・マレーシア・シンガポール・インド・ラオス・カンボジア・タイ・オーストラリアなど10カ国以上の研修生との交流を行った。4年生が、本校の国際理解学習や平和学習の取り組みをエノキ広場やエノキロードに掲示・展示された写真や資料などをもとに紹介した。その後、音楽室において、基町ソーランや蛇踊りを披露したり、歌を歌ったり、研修生の方から自国の踊りを見せていただいたりした。給食時には各学年の児童と交流した。

② 国際理解の日 (12月5日)

はじめに、体育館で世界の子どもたちや食べ物などの現状を知る会をもった後、世界の国々の文化を体験するウォークラリーを実施した。保護者、地域の方、外国の方にゲストティーチャーとして参加していただいた。以下のような体験を通して、世界のいろいろな国の文化を知り、日本とつながりや命の大切さなどを感じることができた。

【各コーナー】

○韓国・・・ゲストティーチャーを迎え、韓国の楽器(チャンゴ、ブク、ケンガリ、チン)の名前とその音色を見たり、聴いたりした。民族衣装の色にこめられた願いや意味なども聞くことができた。

○カンボジア・・・カンボジアの内戦や地雷など、激しい現状を聞いた。アンコールワットの修復に携わった日本人(小西さん)の話聞いて、映像を視聴した。その後、カンボジアの遊びを体験した。

○日本・・・日本の季節や文化を学習した後、ゲストティーチャーに日本の楽器(琴、尺八)の紹介と演奏をしていただいた。琴の体験もでき、とてもよい経験となった。

○中国・・・中国のお茶について専門的な話を聞き、その後、お茶の入れ方の実演を見た。お菓子とともに、ジャスミン茶の試飲をした。ゲストティーチャーに民族衣装を着ていただき、見ることもできた。

○フィリピン・・・フィリピンの学校の様子や食文化について、写真を見たり説明をきいたりした。保護者にも参加していただき、補足説明も行ってもらった。お祝いで食べているフィリピンのお菓子「ピコ」の試食を行った。

○本・クイズコーナー・・・世界の水や食糧事情などがわかる資料を展示してあり、いろいろな資料を見ることができた。アジアの代表的な食事の写真を見て当てるクイズコーナーもあり、楽しみながら食文化にふれることができた。

③ 国際理解週間

国際理解の前の一週間を「国際理解週間」とし、図書委員が児童朝会で「世界の人々」という絵本の読み聞かせを行った。

④ 中国理解学習等

○昨年度に続き、中央公民館主催の「砂持加勢祭り」に上学年全員会を中心に参加した。6年前の学習発表会で取り組んだ「龍(じゃ)踊り」を舞い、改めて日本と中国のつながりを感じることができた。これを機に来年以降も続けていきたい。

4 成果と課題

(1) 平和学習について (略)

(2) 国際理解学習について

昨年度に引き続き、AHIなど外国の方との交流や、国際理解デーで外国の文化に触れる機会を設定することで児童の「多文化共生」の意識を育むことができた。今年は、運動会で4年がフィリピンの「サラコット」、5年が韓国の「サンモ」、6年が中国の「龍踊り」を披露した。実際に踊るという体験をすることで、さらにそれぞれの国を身近に感じることもできたであろう。また、外国からの訪問者に学校を紹介するとき、世界なかよし教室の児童は中国語で説明をすることができよい機会であった。各学年も、給食交流や休憩時間を一緒に過ごす中で、国や言葉が違っても人としての温かさや相手を思いやる心は一緒であるということを感じることができたのではないだろうか。国際理解デーでは5カ国を取り扱ったが、今年度はアジアの国々に限定した。また、地域の方や保護者、以前来て頂いた方をゲストティーチャーに迎えることで児童にとってより身近に感じることもできたようだ。また、文化の違いだけでなく、似ているところもあることや、その国で日本人がどのような関わりをしてきたのか、どんな歴史などを知ることで、日本はアジア諸国の一員であり、関わり合って生きていくことが大切だということを感じたり考えたりする機会になった。課題としては、時間の確保や交流学年の偏りなどがあげられるので、今後検討し引き続き児童の「多文化共生」の意識を高めていきたい。

3 「国際理解の日（国際理解デー）」の考察

（１）なぜ、「特別活動」を中心に取組んだのか

国際理解教育は、教育課程の中で、教科（音楽科や社会科）と関連づけて、総合的な学習の時間に位置づける学校が多い。学校や地域実態に即して学年毎に教材化しやすい面もある。ではなぜ、A小学校は特別活動を中心に据えたのであろうか。それは、学習指導要領の特別活動の目標とその解説に表れている。

【平成20年度学習指導要領 特別活動の目標】

①望ましい集団活動を通して、心身の調和の取れた発達と個性の伸長を図り、②集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、③自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

- ① 一人一人の児童が互いのよさや可能性を認め、生かし、伸ばし合うことができるような実践的な方法によって集団活動を行ったり、望ましい集団を育成しながら個々の児童に育てたい資質や能力を育成したりするという特別活動の方法原理を示したものである。
- ② 多様な価値観、性格などをもつ児童が一緒に一つの目標を共同して追求する集団活動において、（略）諸問題の解決に向けて思考判断を深める。
- ③ 人権を尊重することなどにかかわる自己の生き方についての考えを深め、その大切さを認識できるようにすることである。

（２）「国際理解の日」を中心とした取り組みは、国際理解をめざす教育となりえたか

A小学校は、国や文科省の施策に応じて、実践したというよりは、児童実態、地域実態そして、学校の現状をふまえた必要性と必然性に迫られた取組が発点となっている。また、身近な各国の文化の体験や理解が取り組みやすかったように感じる。

しかし、取組を重ねる中で、世界の国の情勢や諸問題に気づき国際協力のあり方を考える児童の姿が見られた。具体的には、中国四川省の大地震に際し、児童会が提案をして折鶴と手紙を送っている。また、「人権」「平和」に目を向けた「A小平和ルール」を児童会が児童朝会で提案し、その後もそのルールが引き継がれている。このような風土が学校全体で醸成されていく過程には、この20年間の「国際理解の日（国際理解デー）」の実践が少なからず影響しているであろう。

深山（2007）は「国際教育の研究」の中で次のように述べている。

「初等・中等学校での学習と活動において、国際理解をめざす教育は、各教科を効果的に参加させ、調整され、かつ継続的、累積的に毎年前進する計画への適切な手だてによって、学校での学習の不可欠の部分として計画され、実施されるべきである。」また、「学校は、学校を構成するすべての者が、正義と公平、寛容、そしてあらゆる種類と条件の人々への尊敬という資質を獲得できるような雰囲気をつくりださなければならない。」とも述べている。A小学校の実践は、この言葉と符合しており、今後の国際理解教育の一つの発信となりえるであろう。

おわりに

昨今の社会情勢の変化や国際関係の緊張化を受けて、多様化複雑化する社会の中で、「共生社会の実現」は、教育現場においてもキーワードとなっていくであろう。そして、共生社会を生きていく土台として、小学校が果たす役割は大きくなっていくと思われる。さらに、A小学校は長年かけて多文化共生を発信することで、保護者や地域の人権意識の啓発、変容も促してきたと思われる。

また、A小学校へは、日本の教育現場の視察としてJICAやAHIなど毎年50名以上の外国からの訪問があり、人権や平和を土台とし、自治的な多文化共生教育に強い関心があることがうかがえる。来校者からは、A小学校の国際理解教育の実践を聞いたのち、「ぜひ母国に持ち帰って、この実践を生かしたい」という感想も出されている。

今後、多文化共生の学びを継承し、その時々時代の要請に応じた新たな実践を通して、国際理解をめざす教育の発展を願うばかりである。

注1 AHI (Asian Health Institute) アジア保健研修所

1980年から愛知県日進市で、アジア各地の村々で人々の健康を守るために活動する現地の保健ワーカーを育成しているNGO。アジアで政治的混乱、紛争、社会的差別等の弊害が健康に暮らすことを困難にしている人々にお金や物を送るのではなく、現地で働く人材を育成することで、人々の自立を促している。研修を受けた保健ワーカーが、広くアジア全土に帰り「分かち合い」の精神を広めている。毎年、広島を訪れその日程に基町小学校訪問を取り入れ、多文化の子どもたちと交流を行ってきた。

(引用・参考文献)

- 市瀬智紀 (2009). 国際理解教育と持続発展教育の地域における展開に関する一考察.
- 井出孫六 (2004). 「終わりのなき旅」ー中国残留孤児の歴史と現在
- 植木節子 (2008). 教科における「国際理解教育」の可能性.
- 佐藤郡衛 (2004). 国際理解教育の現状と課題.
- 菅井陽子 (2014). 外国人児童の「反周辺化」に関する試みー中国人集住地域における小規模校の事例研究ー 広島大学大学院
- 瀬川 大 (2013). 新学習指導要領下で多文化共生に向けた教育を行うために
- 瀬川 大 (2013). 国籍化する小中学校における理解教育の現状と課題.
- 高桑光徳 (2016). 「『内なる国際化』に対応した人材育成の重要性」明治学院大学教養教育センター, 社会学部編
- 深山正光 (2007). 国際教育の研究ー平和と人権・民主主義のためにー 新協出版社